

豊前国における黒田氏の城郭

文学研究科歴史学専攻博士前期課程一年

中西 秀樹

はじめに

豊前国における黒田氏の支城体制について、先行研究により解明されてきてはいるが、まだ研究の余地があると思うので、黒田氏の支城体制について研究していきたいと思う。

また、黒田氏は織豊系城郭¹⁾の技術を使い築城するはずで、これら織豊系城郭は、土造りの中世城郭とは別で、近世城郭として捉えており、黒田氏が豊前に入部した時期は中世城郭と近世城郭の混在した時期である。黒田氏の城郭を調べる事により豊前地方における近世城郭の初期の実態を把握する事が出来、今後、近世城郭の実態を調べる上で必要と思うので研究対象とした。

併せて、豊臣秀吉による九州仕置後の城郭政策についても、黒田氏を事例に見ていきたいと思う。

黒田氏の入部

豊前国に黒田氏が入部するのは、一五八七年(天正十五)九征伐

後の豊臣秀吉による国割りによるもので、秀吉が黒田孝高に宛てた朱印状²⁾によると

今度為ニ御恩知¹⁾、於ニ豊前国一京都・築城・中津・上毛・下毛・宇佐、六郡之事被ニ宛行一訖。但宇佐郡内妙見・龍王両城當知行分相除之、其外全令ニ領地²⁾、弥可レ抽ニ奉公忠勤³⁾之由候也

天正十五年七月三日

秀吉御朱印

黒田勘解由とのへ

である。

黒田領は豊前国の京都・築城・上毛・下毛・宇佐の六郡で、うち宇佐郡の妙見城と龍王城の二城は除かれた地域である事が書かれている。なお豊前国の残り二郡は、毛利勝信に宛て行われている。

黒田氏が豊前に入国するのが七月以降であるが、この時の動向が「黒田家譜」³⁾によると黒田孝高は、時枝氏の城である時枝城にまぎ入り、その後孝高は築城郡の八田の法念寺を宿舎とし、嫡子黒田長政は京都郡馬ヶ岳城に入っている事が書かれている。

またこの時、秀吉による城郭政策があるが、それは豊臣秀長に宛てたて天正十五年五月十三日付の朱印状⁴⁾で、豊前国の部分を抜粋すると

一、豊前国之儀、是も不入城は、わり、豊後と豊前之間に城一

つ馬が岳と右境目の城と遠候は、其間に一城豊前之内に可置城普請可有候、国々之者共、忠不忠を相糺、知行可遣候間、其分心得、諸事、無油断申付、細々に、少之儀も、以一書、御本陣へ毎日成共不及思案事、於有之者可申上候、請御返事、覚悟可然事

である。

ここで朱印状に書かれていることを、おおまかに解釈すると、重要な城は破却を行い、馬ヶ岳城に入り、豊後・豊前の境目に一つ城を置き、その間が遠い場合にその二城の間に城をもう一つ置きなさい。ということである。

黒田氏の本城と支城

○馬ヶ岳城 (図1)

その所在地は、現在でいえば福岡県行橋市にある標高二一五mの馬ヶ岳山頂を中心とした城郭である。この馬ヶ岳は西山と東山の峰からなり、西山を本丸、一段低い東山が二の丸といわれている。

築城は、九四二年(天慶五)に、源経基が九州に下向した時に築城したと伝えられる。

その後、城主を変えながら存続し黒田氏入部前は、長野三郎左衛門助盛が城主となっていたが、一五八六年(天正十四)の九州征伐

に際し小早川隆景の味方になる事を願い出て許されたため、長野氏はこの城を去っている。

その翌年豊臣秀吉が九州平定に際し、この城を訪れ一日宿舎とした。北側山麓の土塁や畝状堅掘群、水堀は、秀吉がこの城を訪れるにもなつて小早川隆景によつて築造されたものとある。

そして、入部後に黒田氏が居城とし、その後新たに中津城を築き移つていった。なお、在城期間は凡そ半年ぐらいと短期間で、現段階で黒田氏による織豊系城郭の技術をもちいて改修されたかは把握出来ていない。

○中津城 (図2)

つづいて黒田氏が居城とした中津城であるが、その所在地は、現在の大分県中津市にある中津川河口付近に築かれた城郭で、本丸を中心に北東方面に二の丸、南方面に三の丸が配置されていた。

この城は、中津江太郎の居城であつた丸山城を修築し築いたものである。

現在の中津城は黒田氏の後に豊前国へと入封した細川氏により改修をうけたものだが、発掘調査により黒田氏段階の石垣も随所に発見されており、黒田氏段階の中津城の解明が進んでいる。

図2を参考にすると、櫓台を使った横矢掛けをみる事ができる。当時は、石垣を備え、おそらく瓦葺きの建物もあり、黒田氏による近世城郭化がおこなわれていたと考えられる。

○高森城（図3）

その所在地は、現在の大分県宇佐市を流れる駅館川下流の東側台地上に立地。城の対岸には中世の港町江島津があったらしい。本丸を囲い込むように二の丸があり、土塁や空堀を挟んだ東側に三の丸がある。

中津城造営と同時期に黒田孝高の実弟黒田利高によって築城が開始されたとある。関ヶ原の合戦の際には八千の兵を高森城に集結させ豊後へと向かったとある。

高森城は発掘調査によって瓦・石垣・礎石建物が確認されたことから、黒田氏による改修が行われた事で間違いないであろう。城郭の役割は豊後の抑え、また近くに港があるならば港の抑えも兼ねていただろう。

○佐田城（図4）

その所在地は、現在の太分県宇佐市安心院にある標高三〇〇mの青山を中心とした城郭で、そこから派生した尾根や尾根先端にも城郭遺構がみうけられる大規模な城郭である。

この城は佐田氏が代々城主を務めていた。佐田氏とは宇都宮系城井氏の分家で、最初大内氏に従っていたが、のちに大友氏に従い、九州平定後に黒田氏に従い、この城を追われていったようである。

佐田城は黒田氏の支城として位置付けられており、主要部にある石垣などは黒田氏による改修を受けたものであろう。

また、ここから直線距離にして約5km離れた地点に大友方の龍王

城があり、豊後国との境を守る最前線の城であったと思われる。

○一ツ戸城（図5）

その所在地は、大分県中津市山国町にある山国川の上流域に位置する比高二二〇mの山頂部に立地する。山国川は筑前・筑後方面へと抜ける重要な交通ルートである。

中世においては中間氏の城として機能していた。中間氏は黒田氏入封の際には、黒田氏に従い当城の城主を任せられている。

黒田氏の筑前転封後中間氏も筑前へと従い、当城は次の領主である細川氏の支城として存続している。

現在みられる遺構は石垣や瓦・虎口が見られるので近世城郭であるが細川氏時代のものである。

黒田氏段階においても近世化がおこなわれていてもおかしくないはずであるが、まだ確認できていない。

○光岡城（図6）

所在地は、現在の太分県宇佐市西部の上赤尾地区にある標高一三〇mの丘陵上にある城郭で、横堀を巡らした単郭の館城で内側土塁と外側土塁によって構成されている。遺構は土塁と空堀が非常に良好に残っており、一部石垣が確認されおり、城の南側は方形に大きく張り出しており櫓があったと思われる。北西及び南東部は角が削平されており不明だが南西角部においても確認されている。また発掘調査により掘立柱建物跡四棟が発見されている。

この城は宇佐郡の豪族赤尾氏の詰城として機能していたようであるが築城年や存続期間は不明である。

そして、その縄張り構造から黒田氏の城郭ではないかといわれているが、詳しい事は確認はなされていない。

○山本切寄(図7)

その所在地は、大分県宇佐市の駅館川上流部の丘陵上に立地した城郭で、東側に崖と駅館川があり南側には谷が存在している。

この山本切寄は、詳しい事はわかっていないが、その構造は、シンプルで長方形の本丸を中心に土塁と空堀がめぐる構造で角部に櫓台が塁線からはみ出して横矢を掛けるようになっており、高森城と非常に似た縄張りとなっている。

この事から、黒田氏の支城ではないかといわれている。

また、ここから南に、直線距離にして約二・五kmの地点に大友方の妙見岳城があることから、国境を守る最前線の城郭として黒田氏が支城として使った可能性が高いと思われる。

まとめ

まだ正確な結論に至っていないが、黒田氏の場合、在地系城郭に織豊系の技術を取り入れ改修したものであり、共通して石垣が使われ、一部で瓦・礎石建物が確認されている。おおむね作事・普請に

おいて織豊系城郭の技術が使われているようである。

また、地形にも左右されるだろうが概ね塁線は直線的で角部の櫓台を張り出す事によって横矢を掛けるという構造が特徴だと思う。

次に、秀吉の城郭政策の城の配置についても一度みていくと、

- ①馬ヶ岳城に入る事を指示、②豊後と豊前の境目に一城を設ける、③その二城が遠い場合は間に一城を設ける。

①について、孝高は法念寺を宿舎としているが、長政が馬ヶ岳城に入っている。しかしながら、孝高は馬ヶ岳城は領国経営に不適切と考え、新たに中津城を築き居城としている。この事から、短期間のみだが一応は実行されている。

次に②と③であるが、秀吉の考えとしては筑前国からの防衛に馬ヶ岳城、豊後国からの防衛に一城、その間に繋ぎの城を一城という事であろうが、しかし、黒田氏の支城配置は、豊後国側に集中しており、筑前国側は馬ヶ岳城が支城として機能していたというのが定説で一城である。しかし、支城の数は秀吉の指示より多い事がわかる。

なお、この一ヶ国側に集中して配置する事は、豊前国から筑前国へ移封後に支城を築いた際にも、その傾向がみられ、当時仲の悪かった細川氏の領国側に集中して配置していることから、黒田氏の場合、その時最も重要視していた隣国側に支城を配置する傾向があると思われる。

つまり、黒田氏は秀吉の城郭政策を一応は実行しているが、政策と違う行動をもとっている。なので、黒田氏にとって、さほど効力

のない城郭政策であったと思われる。

以上、黒田氏の支城体制について考察してみたが、全てを把握できていないので、なお一層文献史料や縄張り図を参考に引き続き研究を進めていきたいと思う。

註

*1 千田嘉博「織豊系城郭の形成」によると織豊系城郭は、織田信長や豊臣秀吉とその家臣たちが築いていった一貫した系統をもった中世・近世移行期の一群の城郭を指す。また城域の石垣化および礎石建ち・瓦葺き建物・虎口空間などの技術を指す。

黒田氏は秀吉の家臣なので当然その技術を身につけていたであろう。

*2 「黒田家譜」第一巻

*3 「黒田家譜」第一巻

*4 「増補訂正編年大友史料」二七巻 五四六号

参考文献

川添昭二「黒田家譜」第一巻 一九八二年

田北学編「増補訂正編年大友史料」二七巻

福岡県の城郭刊行会「福岡県の城郭」銀山書房 二〇〇九年

「大分の中世城館 第四集・総論編」大分県教育委員会 二〇〇四年

「中津城跡1 中津市文化財調査報告第48集」中津市教育委員会 二〇一〇年

「中津城跡2 中津市文化財調査報告第48集」中津市教育委員会 二〇一一年

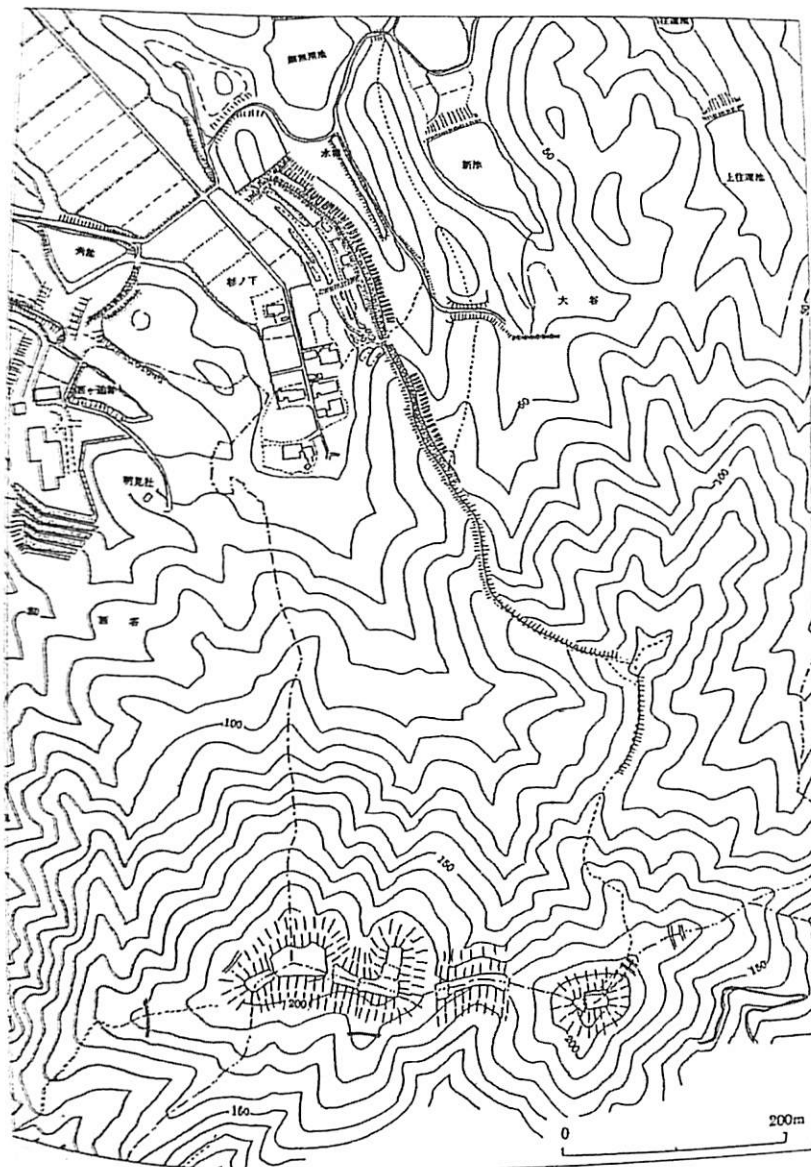
「宇佐地区遺跡郡発掘調査概報」宇佐市教育委員会 一九九〇年～一九九四年

廣崎篤夫「福岡県の城」海鳥社 一九九五年

児玉孝多「日本城郭体系 第一六巻」新人物往来社 一九八〇年

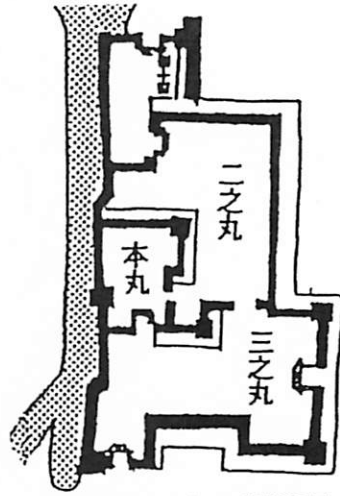
児玉孝多「日本城郭体系 第十八巻」新人物往来社 一九七九年

千田嘉博「織豊系城郭の形成」東京大学出版会 二〇〇〇年



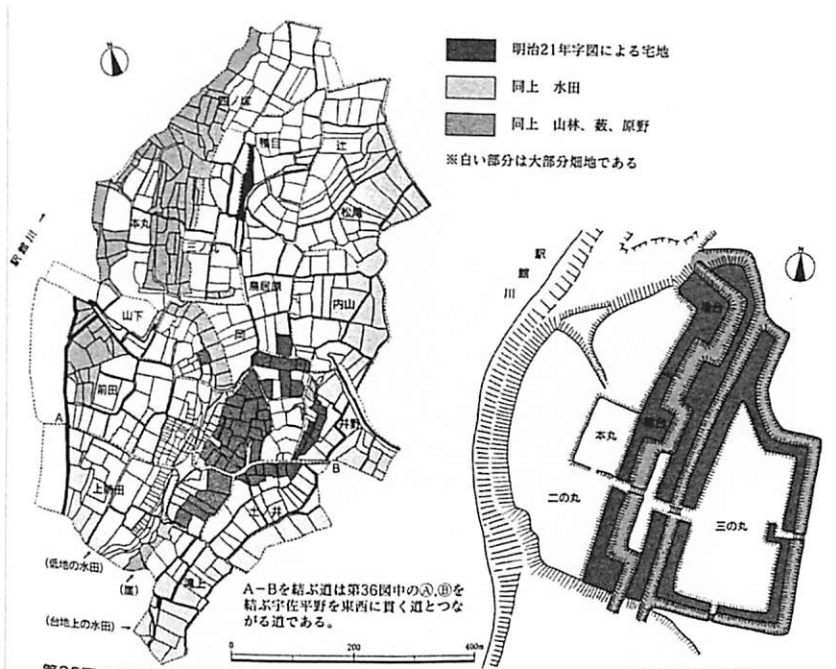
馬ヶ岳城図 (中村修身作成 2007年)

図2 中津城『大分の中世城館』より転載



第10図 中津城黒田期縄張図
(黒田如水縄張図に加筆したもの)

図3 高森城『大分の中世城館』より転載



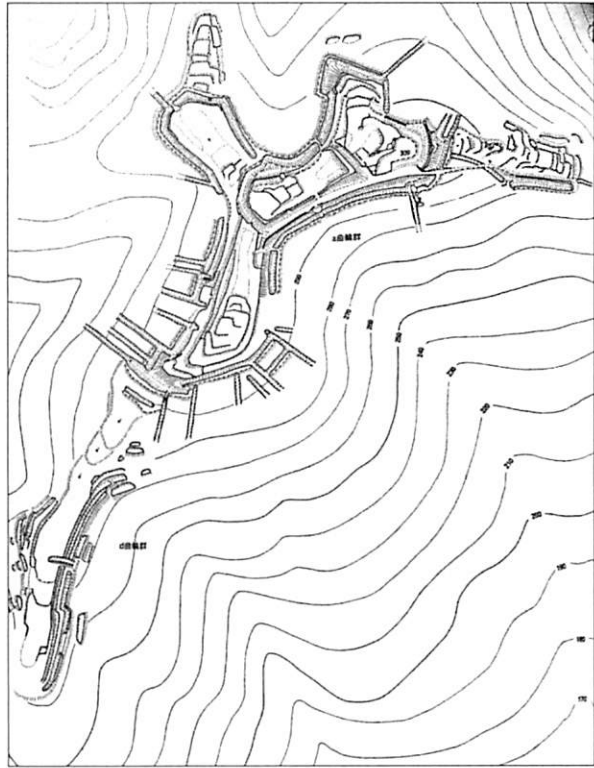


図4 佐田城「大分の中世城館」より転載 中心部拡大

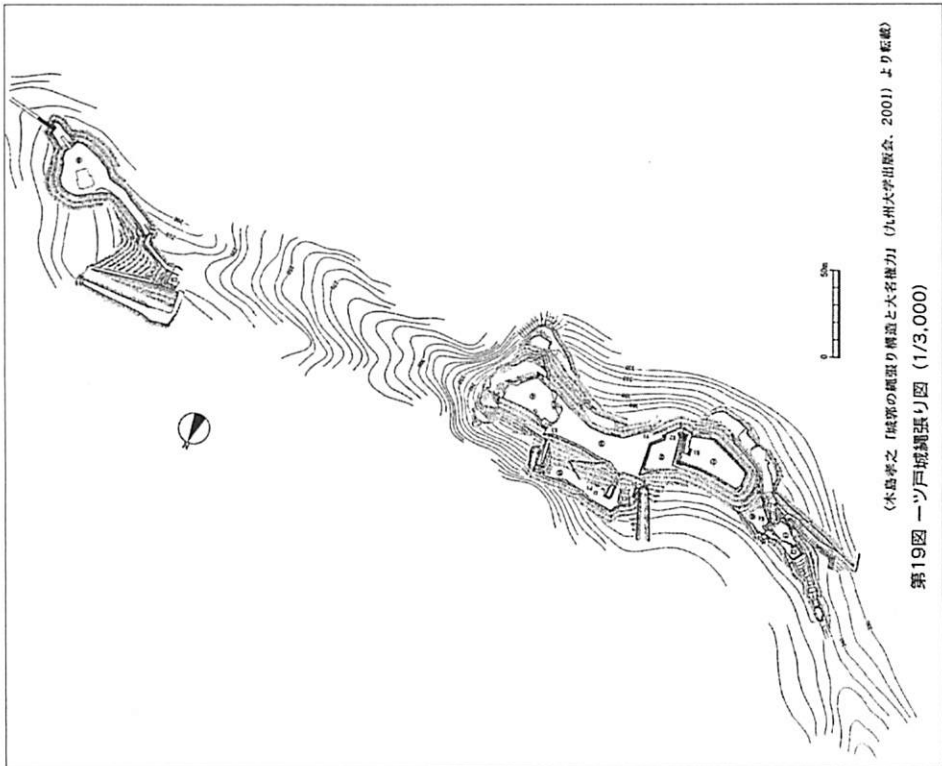


図5 一ツ戸城「大分の中世城館」より転載

図6 光岡城「大分の中世城館」より転載

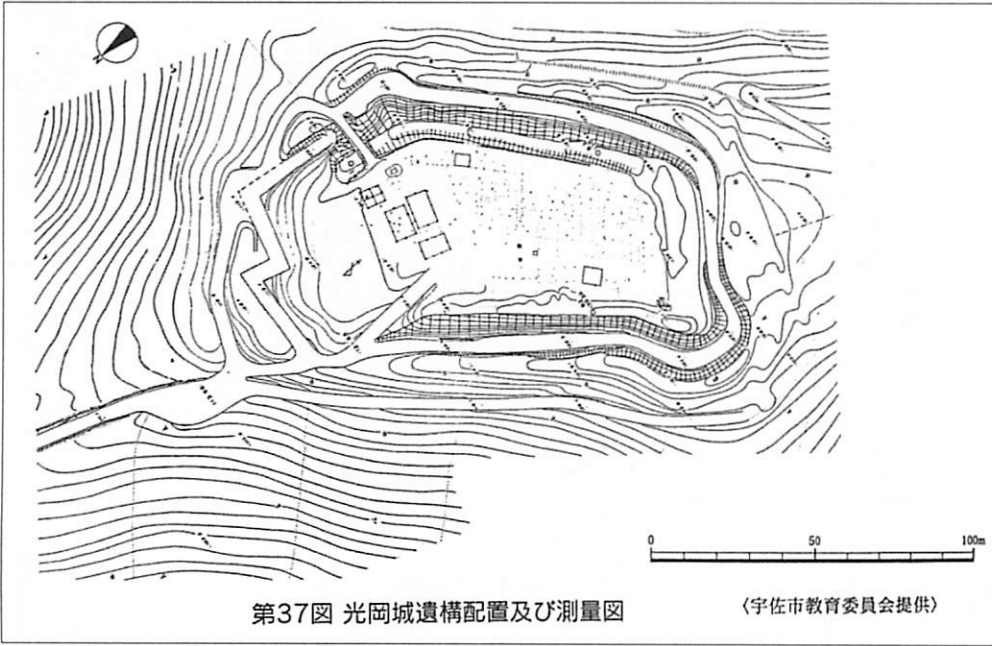
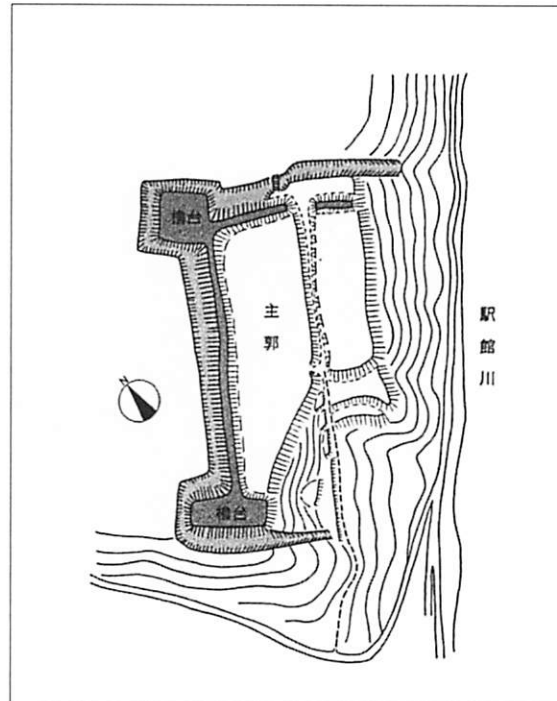


図7 山本切寄「大分の中世城館」より転載



〈千田嘉博「築城術」(「歴史群像シリーズ38黒田如水」学研)より転載〉